

パトス的なものへの態度

—モンテーニュの視線—

和田 渡

古代ギリシアから現代にいたるまで、ロゴス、能動性に力点を置いて考えた人物は数知れないが、他方で、ロゴスのみならず、パトス（情念、受動性）にも目配りをして思索した人物も少なくない。後者にはデモクリトス、アリストテレス、デカルト、スピノザ、キルケゴール、ヤスパース、レヴィナス、アンリ、リオタールといった哲学者だけでなく、日本では哲学の世界からほとんど締め出されているモンテーニュやラ・ロシュフコーといった人物や、作家、詩人などが含まれる。主体の自律的思考や行為、自由の強調などと結びつきがちなロゴス主義とは異なり、パトス的な経験の諸相に注意を払う場合には、外部の自然や内部の生理的・自然的働きをこうむる、不意打ちを受ける、襲われる、あらわな感情をむき出しにされる、激情に駆り立てられるといった、自他の意外な振る舞いや、人為的な誤り、天災などによって何か途方もない事態が到来し、自分や他人がただならぬ状態に引きずりこまれる状況が問題とされる。この状況は、驚愕、苦しみ（受苦）、悲嘆、忍耐、憤慨、慨嘆、憎悪、渴愛といった、個々の主体とその主体に到来するものとの間で生ずる動揺や困惑の色合いで染め抜かれる感情の地平である。到来するものは多様であり、予測不能なものが多い。それは、時に情愛のもつれによって態度を急変させて私に迫ってくる相手であり、時に同様の態度で相手に迫っていく私でもある。それは、外部の荒々しい自然の力でもあれば、

内部の自然としての身体の不意の生理的変化でもある。いずれにせよ、何か思いがけないものの到来が主役をなす状況において、個々の主体は冷静さを失って豹変したり、うろたえたり、時には牙を剥いて相手に挑みかかり、時に傷つき崩れ落ちる脆弱な存在でしかない。それに止めを刺すのが受難としての死である。意想外の出来事としての死の到来こそがパトスの極致である。

先に挙げたパトス的な経験の諸相を主題化した人物のなかで、最も注目に値する一人はモンテーニュである。彼は、日常経験の受動的側面についてこまごまと記述するだけでなく、老いに伴って自分の精神や身体が否応なく崩れゆくさまをリアルに記述しているからである。彼はまた折にふれて、老いる経験と、間近に迫った自分の結末をにらみながら、死の省察を繰り返している。パトスの相を客観的に、いわば他人ごととして語る者は少なくない。それに対して、モンテーニュはパトス的な出来事を自分の切実な問題として捉え、わが身に突き刺さること、自分が不可避的にこうむることとして内側から把握している。自分が醜く変形し、ゆがんで崩れ落ちていく様を克明に描くという困難を、飾りだてしない自己描写の達人であるモンテーニュは軽々と乗り越えている。彼はまた自己描写を他人のパトスの状況を照らし出す武器として用いながら、パトスに翻弄される他人の姿を描いてもいる。

そこで、以下では、『エセー』^①におけるモンテーニユの自己省察や自己暴露、自分や他人の心身の老いと死に関する省察、日常経験のパトリス的側面の具体的な記述と、その背後に潜む彼のパトリスに向き合う態度の一端を考察してみたい。抽象的な思弁や、安手の説教や教訓とは異なる次元で彼が繰り広げる巧みな自己描写を手がかりにして、受身の経験に遭遇することと、その経験を生きることの意味を考えてみたい。

1 変貌する自己と関わる経験

われわれの経験は不断の生成の途上にある。経験は能動的な働きと受動的な働きの相互の連関のもとで刻々と移り変わる。前者は、後の経験に一定の効力を及ぼすとは言うものの、それとしては受動的に転化する。後者は、現在から退いた後にも、能動的な働きのなかに入りこんで経験の変容を促すこともある。こうした過程は、最終的に死によって区切りを与えられるまで、変転して止まない。そうした間断なく変わる経験の多種多様な位相を、どうでもよいような些細な側面も含めて、ゆったりと見渡しながらか、描き続けたのがモンテーニユである。「私は存在を描くのではなくて、推移 (le passage) を描くのだ (中略) 日々の、刻々の推移を描くのである」(805)。これこそが、よく知られたモンテーニユのモットーである。彼は、食事の前と後で変わってしまう自分や、一瞬一瞬に変成する自分の経験の細部にこだわり、延々と記述することを止めない。彼は、平凡でありふれた経験のなかに記述の宝庫を見出すのだ。注意力が及ばず、言葉にする以前に過ぎていく経験は、容易には把握できない面を多く含んでいる。しかし、モンテーニユが『エセー』の随所で魅力的に描いているのは、まさに絶えず変転して、つかみにくい、そのつど姿を変える経験なのである。そこには、高尚な哲学者たちの口に

は決してのぼらないような卑俗な出来事や、曖昧模糊として、何が起きているのか把握しかねるような種類のものも含まれる。『エセー』には、ジャンケレヴィッチがしばしば問題にした「なんだか分からないもの (je ne sais quoi)」と名づけたものの経験の記述が満載なのだ。ジャンケレヴィッチは、過ぎ行く生の瞬間のほとんど無 (le presque-rien) としか言えないようなものへの感受性が豊かであった^②。言葉にして取り出す以前の、つかの間の推移を標的としたモンテーニユは彼の先達である。モンテーニユは、瞬時に移ろいゆくもののなかに、自分の気分や、変化の繊細な姿を見出し、今、現に経過している多様な出来事のなかに、その経過のなかであらたな今に訪れる出来事との重なり合いや、出来事の移行、不意の消失や出現、沈澱、忘却、蘇りといった現象の相互浸透的な生成を認めている。自分の意識の舞台で繰り広げられる出来事に目を凝らしているモンテーニユの姿が浮かんでくる。

しかし、こうした意識の経過現象の追跡は彼の特徴の一面にすぎない。モンテーニユがより丹念に追いかけるのは、低俗でなんら輝きのない、みすばらしい生活の断面である (809)。病による苦痛や身体の時々の不調、美德や悪徳の数々、ありふれた生活のこまごまとしたことなどが話題になるのだ。われわれの生涯は、仕事の苦労や人間関係のもつれなどに起因する困難を伴う反面で、日々の生活は、トイレに急いで駆けこむ、そこで用を足す、食べる、歩く、歯を磨く、風呂に入る、寝る、交わる、自分に語る、人と語るといった、さして珍しくもない出来事の連続である。しかし、平常のありふれた生の断面に注意すると、平凡な事柄のなかに奇蹟の成就や自然の偉大な力の発現を認めることもできる。他方で、注意する間もなく過ぎていく事柄も少くないのは事実だ。何となく何か漠然と気になることがあり、それが何かと思索しても答えが見つからないでいることもある。その間にも何か別の種類のことが起き

ているが、気に留められることなく過ぎていくものもある。モンテーニュの言う「推移」とは、そういう一瞬一瞬に、生の光と影が綾なす出来事のことだ。つかの間の生の表情である。とは言え、それはどれほど見逃しやすいものであっても、過ぎて忘却の彼方に沈んでしまふことなく、不意に蘇ってくるかもしれない。気になることとならないこととの間には、なんらかのレゾナンスが働いているかもしれず、その影響がいずれ出現するかもしれない。感覚、知覚、想起、思考などの相互浸透的な出来事のうちで生起する生には、得体の知れぬものが潜んでいるのだ。明日が今日になり、今日が昨日になるという、当たり前に見える出来事のために、実はよく分からないことが頻繁に起きているのだ。モンテーニュは、こうした不明瞭な出来事に並々ならぬ愛着を持って生きたのである。生きるということは、よく分からないことが次々に生起するなかで、時間的にも、質的にも変化することである。この変化はそれとして確認されるような形を持ちにくい。若干の目覚めた意識的な工夫が功を奏して、年とともに魅力的な姿、形へと結びつく場合もあれば、平凡な意識に埋もれたまま、自分では気づかないままに、周囲に毒をばら撒く醜悪な変化の道筋をたどる場合もあるだろう。いずれの変化も確かなものとしてつかまれることのないまま、やがては生の老化と衰退の渦に巻き込まれていき、ますます分かりにくいものになる。変化が不意の死によって唐突に中断することも稀ではない。だが、この唐突な死も、われわれは自分の経験としてつかみ取ることができない。他人の死に寄り添い見送ることができても、自分の死に立ち会うことはできない。誕生も死も、その間の生も何かしらつかみきたいものや、謎めいたものを含む。了解がつくことは、ほんのわずかでしかないのだ。

刻々とその姿を変える生の経験、寝ていようと起きて生活していようと、一定のリズムで時間を刻む根幹となる経験がある。それに支えられ

パトス的なものへの態度

て事物経験や自己経験、他者経験が成立している。そうした経験の細部の微妙な動きを見つめつつ、考えを記し、記したものに死ぬまで幾度も訂正を加えることを止めなかったのがモンテーニュだ。彼はどんなに小さな経験も見逃さなかった。セックスや排泄行為といった、律儀な人間が丁寧に書きとめたりしない経験、目をそらして知らぬふりをする経験についても積極的な記述を行った。パスカルは、モンテーニュが『エッセー』のなかで実にどうでもよい下らぬことをだらだらと書き続け、自分のことをはしたなく口にしすぎると批判した^③。パスカルはまた、モンテーニュのなかで見取すすべてのものは、彼のなかではなく、自分のなかに見出すとも述べた^④。しかし、おそらくパスカルは、モンテーニュほどには自分のなかをじっと覗きこんではいなかったし、自分のなかの欠点や汚点、醜悪な側面やガラクタ類には目が届いてはいなかった。パスカルの関心は、自分よりもむしろ他人の言動の微細な側面に向けられていた。その把握を可能にするものとして「繊細の精神」が語られた。パスカルはまた幾度となく人間の「惨めさ」を強調したが、自分自身の醜い姿、惨めな有様を抉り出すことはしなかったのである。

パスカルと違って、モンテーニュにとつては、自己の惨めさや情けなさこそが真っ先に注視すべきものであった。モンテーニュ自身は、自己の内部に潜む愚かさや、滑稽さになじんでいただけに、自分を高尚な存在として高みに置きながら他の人間を自己優位の観点から見下ろすことを避け、何よりも、つまらぬ存在としての裸の自分を直視した。とは言え、モンテーニュは自分の存在を蔑ろにしたわけではない。むしろ逆である。彼は徹頭徹尾自分にこだわりの、自分との関係を多様な仕方で行きること執着したのである。自己観察、自己韜晦、自己嘲笑、自己批判といった自己関係の多様な運動こそが、彼の生の推進役であった。「われわれの病癖のなかで最も野蛮なこと、それは自分の存在をないがしろに

することだ」(1110)。自己と徹底して関係することの勧めだ。だが、それは狭い仕方で自分にこだわり、誰にもなじみの自意識や自己の虚飾に拘束されることではない。エゴイズムに支配された自愛的な自己への関心とも異なる。モンテーニュにとっては、自己の内部の姿をありのままに、率直に、飾らずに描く試みこそが重要であった。何のためか。それは、『エッセー』冒頭の「読者に」において書かれているように、自分のありようや人となり、普通の私という人間を読者に見てもらうためである。「私は、素っ裸の自分を喜んでまることが描いたと君に誓ってもいい」(3)。この目的のために、モンテーニュは、自分を研究の題材にした本を書いたのである。「私は他の主題以上に、自分を研究する。これが私のメタフィジックであり、私の自然学なのだ」(102)。彼は、自分自身の枝葉末節までを詳細に検討したことを自負している(4806)。とは言え、『エッセー』は自己研究の記録にはとどまらない。それは、自分以外の人間の研究にも通じている。モンテーニュ自身、長い間の注意深い自己考察が、他者認識を可能にしたと述べている(41076)。「エッセー」には、自己から他人へ、世界へと、世界から、他人から自己へという精神の運動の豊かな往還が見られるのである。

他人の目を意識して自分の経験を歪めたり、隠したりせずに、あけすけに描くという前人未到の試みは、大胆不敵である。素朴な自己暴露は読者に不快感や嫌悪感を抱かせかねないが、モンテーニュは、自己に対する余裕と、適度に距離のある態度にもとづく記述によってそれを回避している。オルテガは、おそらくモンテーニュの考え方に刺激されて、自分を裸にしてさらけ出すことを哲学の定義と見なした⁵⁾。しかし、モンテーニュは、裸の自分、醜い自分を他人に見せることのプラスとマイナスを区別し、裸身をさらす意味そのものにも敏感である。自分を偽って語る、語りたくないことを語らない、自分の醜い部分を表に出すことを

避けて語るといったように、自己の露出をオブラートで包むのが人の常だとすれば、その種の技巧に支えられた告白は平凡で面白くない。このレヴェルにとどまる人は数知れない。

ところが、モンテーニュは、自分の見たくない部分、移ろいやすい傾向、邪悪な側面も率直に記述しながら、それを読む者に嫌らしさや不潔感を感じさせない仕方でも自分を描き出している。自分の姿を他人の目で冷静に突き放して見るといって、常人には簡単にはできない相対化の巧みな業を成し遂げているのだ。この業を可能にしているのは、自分がつまるところ愚かな存在にすぎないという骨の髄まで沁みこんだ認識である。情念に翻弄され、判断を誤り、滑稽なことをしでかし、馬鹿馬鹿しさの限りをつくすのが自分の姿なのだという醒めた見方である。「愚かなことを口にしたとか、したとか分かって、それだけではどうにもならない。自分が馬鹿げた存在にすぎないことを知る必要がある。その方がよほど豊かで、大切な教えだ」(1074)。所詮愚かな存在なのだから、自分を飾ってもしょうがない、馬鹿につける薬はないということだ。だから、モンテーニュの場合、自分の愚かさを反省して自分の生き方を改めるといって倫理的な方向には進まない。ソクラテスのように、賢明さを求めて対話に明け暮れることもない。愚かだからこそこれ見よがしに自分のことを自慢したり、あらぬこと口走ったり、自己の虚飾にも傾いてしまっているのであり、そうした傾向を愚かさの証としてまるごと肯定しようというのがモンテーニュのスタイルの顕著な一面である。『エッセー』全体の記述は、自分の無知、愚劣によって生ずる愚行の数々を包み隠さず率直に語るといって貫かれている。さらにまた、つまらない虚栄心や自惚れに酔い、愚かさの沼におちてもがく人と自分を重ねながら、裸の自分を描き出し、同時に描く自分を描くという、相対化の粹を凝らした試みこそ、モンテーニュの真骨頂である。

2 老いの経験

自己の愚劣さの認識を手放さないモンテーニユは、理性や意志に依拠する経験や、合理的な思考による自己肯定的な経験、能動的に何かをする経験よりも、情念の力によって崩れ落ちる経験、なるようにしかならない経験、受動的に経過する経験の方へとしばしば注意を向けている。主体に関しては、理性的、自律的な思考や責任の主体よりも、脆弱で、みじめで、滑稽な、不意に到来するものに翻弄される主体が視野に納まる。モンテーニユが度々言及するのが、身体において予測を超えて現れる種々の出来事、たとえば、病気や体の不調、変調、老化などといった自動詞的な経験である。崩れる、衰える、無くなるといったこの種の経験はひそかに、ほとんど気づかれぬ間に経過する。たとえば、風邪にかかる、下痢になる、頭痛がする、しみが増える、肌が黒ずむといった経験は、原因が何であれ、主体の意に反し、計画や予測を超えて起こる。身体の生理については、こうあつてほしいと願つても、そのとおりにならない。また、「年齢について」で述べられているように、人間は数々の災難に見舞われ、長生きの期待は裏切られる (cf. 236)。思わぬ時に、思わぬ仕方であらざる死も同様である。「する」ではなく「なる」出来事は、時々の医学的対抗策が可能でも、その根本的な「なる」のリズムそのものを変えることはできない。この出来事は、遅かれ早かれ、われわれを死に追いやるのである。「われわれのありようの定めるところに静かに耐え忍んでいかなければならない。医学が万全でも、われわれは年老いて、衰弱し、病気になるようにできているのである」(1089)。病気に先待つのは、不可避の死である。死については、3で改めて扱う。

モンテーニユの筆は、老いを語るときに最も冴える。老いはほとんど

パトス的なものへの態度

目立たない仕方で進行し、気づきにくい側面を持つが、他方で、身にこもる経験のなかでは語りやすい側面も多く含む。モンテーニユは、年を取れば、肉体という建物はおのずからがたがたきて、崩れ始めるが、やむを得ないこととしている (cf. 1089)。固有名詞の記憶喪失、思考力の減退、性的エネルギーの衰弱、発音の不明瞭化、節々の痛み、身体の硬直化とさしみ、視野の衰え、皺の増加、毛髪風景の急激な変貌といった数々の老いの徴候は、われわれを否応なく身体や精神の老いに直面させ、老いとじっくり向き合う時間を提供してくれる。老化は、一種の「汝自身を知られ、身の程をわきまえよ」という自然からのメッセージである。このメッセージには、ソクラテスの同じ言葉がもたらす激励や叱咤の響きはない。一般に自分の老残の姿を知ること、老いの身の行く末に気づくことは、悔恨や嘆きにしか通じず、憂鬱な気分が晴れることはないのだ。自己認識を自己修正につなげるという積極的な試みは生じてはこない。老いには、無様な姿を見せる自分に落胆し、醜く変わる哀れな自分を悲しみ、衰えていく有様にうろたえるという落ちこむ気分がつきまとうだけなのだ。しかし、モンテーニユは、老いの変化に伴うこうした自己のネガティブな感情に一方的に拘束されることなく、それを相対化しながら、老いの変化を余裕を持って観察する態度を維持している。老いる自己を恥じたり、恐れたりする気配はまったくない。モンテーニユに固有の態度である。

モンテーニユは、目に見える肉体の外観や、感じられる内部組織の生理に衰えを限定してはいない。肉眼では見えない心も、肉体の衰えとともに確実に老いていくのだ。心の老いは、感受性の枯渇、反応力の衰退、柔軟性の喪失などとして現れる。モンテーニユは、両面の老いを比較し、両者の交錯するさまを自己の経験に即して丹念に追いかけている。「老いは、顔つきよりも精神に多くの皺をきざむ」(817)。モンテーニユの視線

は、誰もが鏡で確認できる顔の皺を突き抜けて、直に見ることのできな
い精神の皺にまで届いている。おのれの卑小さに気づかず、偉そうに尊
大に振舞う、居丈高な物言いをする、自分のとんまな振る舞いの滑稽さ
を笑えない、他人の哀れみのこもった眼差しに気づかなくなる、他人へ
の邪悪な視線の出現をつかめない、自分のいやらしい心の働きの対する
感受性を失うといった傾向は、精神の皺が増えた証拠と見ることもでき
る。それが深刻な事態であるという反省の気持ち動けば、皺の手入れ
も可能になるかもしれないが、目に見えない次元のことだけに容易では
ない。モンテーニュ自身は、心身の老いの徴候をじっくりと観察し、記
述する立場にとどまっている。老いに抗して倫理的な自己修正を試みよ
うとはせず、老いの徴候をゆくりと見守っているのだ。「時には、肉体
が老いに参ってしまうが、心が先に参ってしまうこともある」(88)。い
ずれにせよ、日々、老いは深まっていく。肉体も心も下り坂の道を急ぐ。
モンテーニュの視線がそれを追いかける。

自分の老いの徴候を追跡する半面で、モンテーニュは、周囲の人間の
老いからも様々な刺激を受けている。久しぶりに対面した知人の急激な
老い姿に愕然とする経験は誰にもなじみのものかもしれないが、モン
テーニュは日頃よく出会う老人に目を凝らしながら、老いの光景とつき
合っている。しみや皺が増え、かさついてくる素顔や、日々ぎこちなさ
を増す動作は、残酷な老いの状況を端的に物語る。自分も他人からその
ように見られていると思えば他人事ではないはずだが、一般には、自分
の老いる姿は見えにくい。それに対して、他人の老いは、欠点や悪癖と
同じように、くつきりと目に入る。さらに他人を注意深く観察するとな
れば、他人が日々刻々と老いていく様子は、一層はつきりと見て取れる。
「老いが、私の知り合いの方々に、毎日毎日、なんと多くの変化
(*Métamorphoses*)をもたらししている」とか(817)。自分の老いに敏感で

あったがゆえに、モンテーニュは周囲の人たちの老いに伴う変化を見逃
さなかった。メタモルフォーズの存在、それこそが人間を定義する第一
のものであった。

モンテーニュによれば、老いは強力な病であり、ごく自然に、こつそ
りと進行する。老い以外の多くの病気は、特定の症状が現れ、医者によ
る診断や治療、手術が可能である。ところが、老いはひそかに進行して、
われわれの存在を徐々に切り崩し、ぼろぼろにしていく。ジャンケレ
ヴィッチは、死を誰もがかかる病気だと見なしたが、老いもまた誰もが
避けられない、すこぶる力を備えた病気なのだ。モンテーニュは、医者
の力に頼れないこの病気の対抗策をさりと語っている。それは、老い
の進行を遅らせる努力や用心を欠かさないということだ。言い換えれば、
老いつつあるという現状を意識しながらも、老いに抵抗するという自由
を行使することだ。無駄なあがきに近いものかもしれない。しかし、ひ
弱な抵抗でも、老いの進行を少しは遅くすることはできるだろう。意識
するという効果は少なくはない。とは言え、老いは手ごわい病気なのだ。
生半可な抵抗や、小ざかしい工夫などではなかなか太刀打ちできない。
「結局のところ、老いが私自身をどこに連れて行くのかはわからない」
(81)。老いは、日々、確実にわれわれを崩していくが、その先に何が待
つかは知りえない。老いに伴う心身の崩壊は確かでも、その症状の正確
な診断や治療は難しいのだ。

しかし、老いの経験はマイナスの側面ばかりではない。老いは、幸い
にも生きながらえたという生の証であるから、老いにはそのことを感謝
する時間が結びつく。「後悔について」のなかで、モンテーニュは、自分
の肉体という草が生え、花が咲き、結実し、それが枯れる局面に立ち会
える幸福に感謝している(812)。若さの特徴は、身体や観念が放熱する
時間であり、時に狂乱であり、その過剰さが若さの最中で自らを振り返

ることをしばしば困難なものにする。それに対して、老いは身体の水分の枯渇化、心の硬化化である。それに伴い体や心は大抵の場合醜く変移し、崩れてゆくが、その過程がゆっくりと進むがゆえに、気づきにくい側面もあるものの、老いのあり様を冷静な距離を取ってじっくりと見つめることが不可能ではない。それを通じて見えてくる老いの風景は、疑いもなく惨めなものである。しかし、「老いた」という実感は、ともかくも「生きた、生かされてきた」ということの幸福な確認でもある。老いは、長い過去を担って現に在ることの喜びを感じる時間ともなるのである。この時間のなかでは、老いることの惨めさの自己確認と、生かされてあることの幸福とが共存する。しかし、この種の幸福感は、われわれを生かしているものの意図や配慮がつかみきれず、いつ逆の事態が出現するか分からないために、常につかの間のものとしてしか意識されないことも確かである。生は死と重ねて意識されるのである。モンテーニュには、この側面が顕著に認められる。

3 メメント・モリ―死への態度―

死は年齢を選ばない。死ぬ時も、死ぬ場所も不明である。予測は可能でも、都合のよい希望は許されても、その通りになることは稀である。誕生と死という生の両極端は暗がりとして残る。生の無明性と生の須臾性、死の不意打ち性格は、人間存在の有限性に思いを凝らした哲学者たちに共通のテーマであった。だが、死を考える時期は人によって様々だ。自然年齢的に若い時代に、死について突き詰めて考えた人は少なくない。その原因は、自身の病弱性、近親者の死、戦場での臨死経験など様々である。たとえば、若い時から重い病に苦しみ、政治の世界では困難な目に幾度となく遭遇したセネカはこう書き記した。「生きることは生涯を

かけて学ぶべきことである。そして、おそらくそれ以上に不思議に思われるであろうが、生涯をかけて学ぶべきは死ぬことである^⑦。生の目には見えない形を生そのものなかで把握することは難しい。死というものに生を映し出す鏡の役割を与えることによって、生の意味や方向を明らかにできるといえる考え方だ。また、何度となく戦場に赴いて敵の攻撃に曝されたマルクス・アウレリウスも、死の省察を重ねた。戦場で傷つき死んでいく兵士を傍らに自省する彼にとって、死はすこぶる現実的なものであると同時に、人間の運命や自然についての瞑想を深める契機ともなった。

それに対して、老いを感じる時期になって、自らの老いと重ねながら死を考えた人物がモンテーニュである。「生きた、生かされてきた、老いた」という幸福な実感に支えられているモンテーニュには、死の切迫感希薄である。セネカの言葉に見られるような、死を学ぼうという実直な態度もない。死に対するゆったりと構えた態度が目立つのである。モンテーニュの過剰なまでの自分語りを嫌悪したパスカルは、彼の死論にも文句をつけている。「彼は、その著作全体を通じて、ゆるんで、だらだらとして死ぬことばかり考えているのだ^⑧」。人間の惨めさを振り出し、救われるためにはイエスに倣う他はないと、人々を信仰の道へと促した誠実なパスカルにとっては、モンテーニュのだらけた態度が許せなかったであろう。しかし、老いたモンテーニュに謹厳さを求めても無駄だろう。彼の魅力は、常日頃の自己と他者の観察や、決して硬直することのない思考の「ゆるみ」、精神のしなやかな運動にある。思考は、警戒を怠るとすぐに狭い断定に行き着き、行き場を失う。思考は、別の思考によって不断に碎かれることが必要である。

『エッセー』には、モンテーニュの死に対するふたつの態度が見て取れる。ひとつは、死を意識して待ち受ける態度であり、もうひとつは生を

重んじて、死を軽んじる態度である。両者の間には老いの時間が介入している。前者は、モンテーニュがセネカやキケロ、マルクス・アウレリウスといったストア派の哲学者との対話から引き出したものである。「死がどこでわれわれを待っているかは分からない。だからいたるところで、それを待ち受けよう。あらかじめ死を考えることは、自由についてあらかじめ考えることである。死を学んだ者は、奴隷であることを忘れた者である。死を学ぶことによって、われわれは隷属と拘束から解放されるのである」(8)。時間も場所も選ばず、老若男女を問わず襲いかかってくる死は、モンテーニュによれば圧倒的な敵である。この敵に勝てる武器はない。それゆえ、武器を持たずに敵を打ち倒す術を学ばねばならない。その術とは、意外にも、死と観念的に馴れ親しむことである。現実の死と対峙することは不可能であるが、観念のレヴェルで死の懐に飛び込むという戦略を選ぶことは可能である。この戦略は、到来する死の外側にあつて死におびえたり、恐れたりする一般的な態度を拒否し、死を内面化することである。死の内面化とは、まずは、モンテーニュが例としてあげているように、馬の躓き、瓦の落下、ピンがささるといった一瞬の出来事と絶えず死を重ね合わせ (cf. 86)、その他の歓楽的な場面にも突然の死がやってくることを常に考えて生きることである。しかしそれにとどまらず、そのように死を不断に考えて生きている自分が不在化する場面を想定することでもある。不在化の対象は、自分を含み生きとし生けるもの全体に及ぶ。誰もがいなくなり、今ある状態がなくなる状態を想定すること、すなわち、死がすべてを支配する状況をあらかじめ考えることこそが死と馴れ親しむひとつの形であろう。セネカが「死の学び」によって強調したことでもある。マルクス・アウレリウスが、「すべてかりそめにすぎない。おぼえる者もおぼえられる者も」^⑨という短文で示したことでもある。モンテーニュによれば、われわれが生きて、

人や、事物、風景と交わるさなかで、同時にそれらが不在と化す局面を絶えず想定して生きるという生の二重化の作業は、死に一方的に絡めとられ、死に屈服するというあり方からの解放を意味する。ありうる事態が到来した時に、その事態をありうることとして受け止め、あらかじめ待ち構える準備ができていれば、死はすでにその到来以前にわれわれの支配下に置かれていくことだ。死を手中に納めるといふ自由な構えのなかで生きることである。

しかし、こうした死をあらかじめ考え、死と親しむ態度の強調は、先述したように、モンテーニュの死論の一面でしかない。他方で、彼はあらかじめの死の準備とは、一種の死の目的化に他ならないと見なし、これに異議を唱えている。モンテーニュは、「哲学者の生涯はすべからく死の研究である」というキケロに逆らつて、言葉遊びを交えながら語る。「だが私の考えでは、なるほど死は生の末端 (bout) ではあるが、生の目的 (but) ではない」(1051)。モンテーニュは、生を整え導き、生に耐えて生きることが最も重要であり、「いかに死ぬべきか」は、「いかに生きるべきか」に比べればつまらない設問項目にすぎないと言う (cf. 1052)。死について心配することの愚を説いたエピクロスに近い発想だ。死を先回りして思い煩うことは生を窮屈なものにする。生の結末に関しては、俗人のように愚鈍で理解力も乏しい方が死におびえることも少ないのだ (cf. 1051)。モンテーニュは冗談めかして、死に無頓着で鈍重な愚か者の学派 (escolle de bestise) を開こうとさえ提案し、これこそ学問がわれわれに可能にする最後の果実だとさえ述べている (cf. 1052)。この学問においては、無用な想像力や思考力を持たない動物がわれわれの教師であり、動物の死に方にこそ学ばねばならない。いずれにせよ、無知の知が哲学への出発点となるというソクラテスへの共鳴と、無知、愚鈍にとどまるのもまた哲学であるという反ソクラテスの視点が見られて興味深い。ど

んなに先回りしても、死を自分の経験としてつかみ取ることができない以上、死は分からないままにとどまる。それを恐れても空しいだけだという発想の背後にはまた、モンテーニュの周辺に、生きている間は死のことなど歯牙にもかけず、最期の時をその時と心得て、わずかの薬や手当てを受けた後に、従容として死に就いた人々が多くいたということが考えられる。時期が来れば、他人に席を譲って立ち去る潔さを身につけていた人々だ。高度な医療技術や手厚い看護などによって、迎えるべき死が先送りされてしまう今日の人々との彼我の差は明白である。

周知のように、哲学を死の学びと見なしたプラトンははじめとして、現代の実存の哲学者にいたるまで、死は実に多種多様な仕方でも語られてきた。死を自然の出来事として待つ姿勢を強調した者、死を先取りして生きることを重視した者、死の偶然性や死の神秘的な性格を考察した者など様々である。荒行を通じて死の際に身を置き、別種の生を体得する者もある。そのなかで、死と慣れ親しむ態度の強調から、年を重ねて死と疎遠な態度の重要性を説くにいたったモンテーニュの独自性はどこに見出されるのであろうか。それは、彼の死に関する教説のなかにはない。モンテーニュと、死を主題化した他の哲学者たちの考え方の間には根本的な違いよりも、類似性の方が多く見られる。死という経験不可能な次元についての思索は、力点をどこに置くかで多岐に分かれることは否定できないが、死の切迫性の自覚、生の姿を浮き彫りにする死の効果への期待、死の意図的忘却、生のなかに死を見るときといった彼らの死論の特徴は、モンテーニュの多面的な思索のなかにも読み取れるのだ。しかし、モンテーニュを他の人物と大きく隔てるのは、その死論よりも、死に関する彼の語り口にある。すなわち、彼は死に関する思索の内容を書き記すだけでなく、予測を超えて到来する死に対する自分自身の態度をもあからさまに記述しているのだ。死を考える自分の姿を別の視点から見定

めるといふ余裕のある姿勢がそれを可能にしている。その余裕が、実直に死を語る堅苦しさや大げさな身振りを遠ざけ、死の語り一種の軽やかな愉快さやユーモア、暖かさをもたらしている。死と親しみ、死を友達のようにして語る語り口や、死からふいと顔をそむけて知らんぷりするモンテーニュの態度には、老人にして持ちうる魅力と風格が感じられる。だからこそ、モンテーニュの「死論」を読むのは無上の喜びともなるのだ。

以上、『エッセー』におけるモンテーニュのパトスのものに対する関係に焦点をあてて述べてきた。モンテーニュの最も魅力的な貢献は、パトスのものの出現とそれに伴う混乱や動揺などを、自己の経験に即してあげすけに語ったところにある。己を愚人と自覚していたモンテーニュは、低い場所から語り続け、高みから見下ろして尊大に語るやり口を好まなかつた。低地からの視線は、自分自身と自分以外の人間の愚かしい裸の姿を照射した。『痴愚神札讃』という傑作を書いたエラスムスは、人間の痴愚を教会の説教場所のような少し高みから面白おかしく描いたが、モンテーニュの視線はまず愚かな自己を貫いて、それから周囲へと放射され、再度自己へと向かっている。そうした視線の往還に支えられて記述がパトスのものをめざす時、暴露されるのは何よりも自分という存在の脆さ、病や老化などによる崩れやすさである。さらに、死という受難によって断ち切られる生の一面と、それに直面する際の、死をあらかじめ考えろという態度と、より深く生を享受することに専念するために死を考えないという態度の二面性である。モンテーニュの死を軸にした想念には、マルクス・アウレリウスの場合のように、私もあなたも、動植物も、命あるものはいなくなり、風景も変わってしまうのだという悲哀の響きはない。死に対する彼の態度は、積極的方向であれ、消極的方向であれ、きっぱりとしている。そして何よりも、軽快な響きが

ただよっている。

モンテーニュの痴愚への偏愛と老化との戯れ、死との観念的やりとりは、いずれも好ましいものと映る。宗教戦争という血なまぐさい乱世を生き抜いたモンテーニュの態度が、別の意味での乱世を生きていかねばならなくなったわれわれに示唆するものは少なくない。彼は、先をよく読まない思慮の狭量さ、想像力の貧困、あるがままの現実を見損なう浅慮や先入見などを『エッセー』の随所で槍玉にあげた。われわれは、モンテーニュへの還元が必要な時代に生きていると思われる。

注

- ① *Les Essais de Michel de Montaigne*, Tome Premier, Tome Second, Press Universitaire de France, 1978. 以下、本書からの引用や参照は、本文中にアラビア数字で挿入する。
- ② ジャンケレヴィッチの眼差しと、日常の具体的経験を見つめていたモンテーニュのそれとの間には類似性が顕著である。ジャンケレヴィッチは、「ほとんど無」が具体的経験に対応すると述べている。Cf. Vladimir

Jankélévitch, *Premières et dernières pages*, Éditions du Seuil, 1994, p. 209.

③ Blaise Pascal, *Pensées*, Éditions du Seuil, 1962, p. 279.

④ *Ibid.*, p. 286.

⑤ オルテガ、A・マタイス、佐々木孝訳『個人と社会―人と人々―』白水社、一九八九年、二二五―二二六頁参照。

⑥ Vladimir Jankélévitch, *Penser la mort ?*, Éditions Liana Levi, 1994, p. 25.

⑦ セネカ、茂手木元蔵訳『人生の短さについて 他二編』、岩波文庫、一九八〇年、二二頁。

⑧ Pascal, *op.cit.*, p. 283.

⑨ マルクス・アウレリウス、神谷美恵子訳『自省録』、岩波文庫（第五一刷）、一九九三年、五四頁。

⑩ モンテーニュと異なり、『自省録』には、マルクス・アウレリウスの悲哀感や無常感に彩られた死の観念や、死の自然必然性に対する思いが色濃く現れている。

（阪南大学教授）